

子規と滑稽 (3)

八塚一青

一茶の滑稽味に溢れた句を誉めながらも、一茶の真面目な句には佳作が多いとあえて書いているように、子規は良くも悪くも真面目でした。漱石に「正岡子規」と題する短いながら愛に溢れた文章があります。(太字は引用)

妙に気位の高かった男で、僕なども一緒に矢張り気位の高い仲間であった。

子規が生きた時代、特に子規のように地方から東京に出てきた者は、ひととき高い気位を持って生きていました。舐められてはいけない。一茶の句が確かに気にはなるけれど、自分が一生懸命に走るレーンではないと思ったのかもしれませんが。生涯をかけて俳句分類を手がけた生来の生真面目さは、子規の「推し」を蕪村にしました。

恐らく、江戸の俳諧を一句一句振り返り自分の中に入れていった俳人は今も昔も子規だけです。「俳諧の滑稽」は、子規の血となり肉となります。俳人の長谷川權氏は『子規の宇宙』で書いています。

実は子規のなかには江戸俳諧の滑稽の精神が脈々と生きつづけているのです。それでいながら、子規の句はいかにも新鮮な印象を与える。江戸の俳諧を切り捨てたのではなく、江戸の滑稽を新しく生まれ変わらせたところが、子規が成しとげた俳句革新の意義であると思います。

子規の滑稽感が分かる文章があります。「万葉集は歌集の王なり」で始まる『萬葉集卷十六』です。

全二十巻ある万葉集の中でも、第十六巻は特異なもので知られています。十五巻までの分類に収めきれなかった歌を集めた巻。滑稽な歌も多く、いわゆる「おまけ」の巻なのですが、子規はこの十六巻を高く評価して「何故に滑稽は排斥す

べきか」と語り、

滑稽は文學的趣味の一なり。(略) 歌を作る者は萬葉を見ざるべからず。萬葉を讀む者は第十六卷を讀むことを忘るべからず。

と江戸俳諧のみならず、万葉の頃から詠まれてきた滑稽を肯定しています。

近代俳句の出発点となった、一茶そして子規。そこに滑稽はちゃんといました。間違いありません。芭蕉の古池の句を、ただ蛙が飛び込んだだけと言い切る子規に滑稽精神は宿っています。彼が生きた時代と彼が患った病によって、滑稽の光量は抑えられてしまいましたが、決して消えてはいません。漱石の文章でおや？と思うところがあります。子規について、

非常に好き嫌いのあった人で、滅多に人と交際などはしなかった。

子規の周りには門人も含め、たくさんの人が集まってきたことは有名です。子規の明るさが人を惹きつけたのだと思っていました。ですが、盟友の漱石は、子規は人嫌いだと言っています。

もしかすると、野球が彼を変え、野球が正岡常規を正岡子規にしたのかもしれませんが。子規からその野球を理不尽に取り上げ、動いてばかりだった男を病牀六尺に閉じ込め、「写生」を唱えさせた天は残酷です。しかし、それでも子規は痰のつまりし仏になって、最後まで神に滑稽問答をしたのでした。